



木原四郎の 水利を歩く in 魚沼

新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが、魚沼市の農業を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。

秋風にゆれる「スモスモ」をぬき、
視界が開けた高台に立った。
目の前に、八海山・中ノ岳・駒ヶ岳の
越後三山が見える。ここから見ると
この三つの山が、麓の一角を包み込み
守っているようだ。
越後三山・・・
地元の人々は、それぞれの頭文字を取って
はなごと呼び親しんでいる。
この景色、私には何か懐の大きな
母親に抱かれていたような
温もりを感じた。

新潟の原風景といえば、
どこまでも広がる豊かな水田。
この景色は、確かに
行き渡る水があって作られています。
これは、水と農業、そして
新潟の未来を考える
シリーズです。



一日市ひかり農産を訪ね、
代表理事の桜井元雄さんに会った。
まず、ほ場の整備と法人化に取り組んだそうだ。
さらに転作作物の工夫で「魚沼そば」の製造に
手応えを感じ、発展のきっかけをつかんだ。
これらの活動が農林水産大臣賞に
つながった。
また、魚沼産コシヒカリ「一日市米」を販売、
ブランド化に成功。
ほか、園芸品種の本格導入も高評価されている。
今後も農産品を通じて、せいじなる
地域への貢献を目指している。



イラストレーター
木原 四郎 さん
1946年、佐賀県佐賀市出身。
「旅するイラストレーター」として
新潟県内を歩き、風景や人物を描き
続ける。独特の柔らかいタッチの
イラストと心温まる文章で人とモノ
の出会いを紹介し、人気を集める。
NHK総合「金よう夜さらっと新潟」に
出演。各地で展覧会も開催する。



水争い収める 円形分水工の役割

純白の雪をまとった魚沼の山並みは、
いつも神々しい。名産はコシヒカリだが、
ユリの一大産地としても全国に知られ
ている。
この地はまた、雪深い土地でもある。
それゆえに、これらの河川は、いつも
豊富な水量に恵まれていると思われが
ちだが、実は降雪年によって大きく
異なる。
日本百名山「越後駒ヶ岳」を源流と
する佐梨川もその典型だ。特に、左岸
の上原堰受益地では戦後、桑畑の開田
で水田面積が増えたため、農業用水を
めぐもめ事がしばしば発生していた。
そうした地域事情を踏まえて、この土
地の人々は県営用水改良事業の着工に
当たり、新たな水利施設を築造するこ
とによって積年の憂患を見事に解決し
たのであった。その施設が「円形分水
工」である。

この施設は、佐梨川頭首工から取水
した水を公平に下流域へ送るために、
いったん地下へ送る。そして、そこか
ら送水された水をこの施設の真ん中に
サイホン式に湧き上げさせ、その水を
外側の円筒に設けられた仕切り板に
よって二つの支線水路へ公平に分水し
ているのだ。この比率は、豊水であつ
ても、渇水の時でも常に両水路へ一定
の比率で配分されている。
現在の施設は、昭和34年に建設され
た初代の老朽化に伴って改修された二
代目だ。県内では数少ない現役施設だ。
ここから送られる用水は、魚沼の沃野
（よくち）を潤し、地域の農業を支え
る一翼を担っている。
それにしても、里山の木立の中で黙々と
働き続けるこの円形型の不思議な施
設は、子どもたちにも興味を惹くのだ
ろう。水利の恵みを学ぶために、地元
の小学校では毎年見学に訪れ、施設の
役割と機能を学んでいる。水争いを取
める「魔法の施設」を通して、子ども
たちの目には郷土の新しい農の風景が
広がっているのではないだろうか。

新潟大学名誉教授
伊藤 忠雄 さん
1944年、新潟市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は
農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年
3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内
の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営論を議論する
「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究セン
ター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。

この紙面を読んだご感想を、ハガキ、ファクス、Eメールでお寄せください。



「水利が拓く 実りの明日へ」キャンペーン事務局 (新潟日報社広告部内)
新潟市中央区万代3-1-1 ●TEL 025-385-7474 (土日祝日を除く/10:00~17:00) ●ファクス 025-385-7476 ●Eメール minor@niigata-nippo.co.jp
○主催/農林水産省北陸農政局 ○共催/新潟日報社 ○後援/新潟県、新潟県土地改良事業団体連合会、JAグループ新潟 | 企画・制作/新潟日報社広告局

